シーワールドのアニマル達

●タマカエルウオ

タマカエルウオは、小笠原諸島や南西諸島に分布する体長10cmほどの半陸生の小魚で、波しぶきがかかる岩の上で藻類を食べて生活し、産卵も水上で行うという変わった習性をもっています。平成13年10月よりトロピカルアイランドのタイドプールを再現した展示水そうで飼育を開始したところ、潮が満ち引きするように水面が上下する水そうの環境がタマカエルウオの飼育には合っていたようで、飼育開始1年後には水そう内で産卵が行われるようになりました。繁殖行動をじっくり観察してみると、独特な行動様式があることに気付きました。オスは波しぶきのかかる岩のへこみを巣穴とし、近づいてくるメスに頭を左右に振って求愛し、巣穴へ誘い込みます。メスが巣穴に入ってから産卵が終了するまでの1時間～3時間、オスは巣穴の入口で求愛行動をしたり、メスと交代で巣穴への出入りを繰り返します。産卵を終えたメスが巣穴を去った後、産み付けられた200粒ほどの卵がふ化するまでの約10日間、オスは巣穴にこもり外敵から卵を守ります。タマカエルウオの繁殖行動については少しずつわかりはじめましたが、稚魚の育成はこれからです。ふ化した全長4.1mmの稚魚に生きたプランクトンをいろいろと与えてみてもなかなか食べてくれません。稚魚が好んで食べるエサ探しは、当分続きそうです。

（古市 敦子）

▲タマカエルウオ *Alticus saliens*

●ノコギリザメ

ノコギリザメは、日本各地の水深100m～800mの大陸棚や陸棚斜面の海底に生息し、成長すると体長1.5mほどになりますが詳しい生態はよく分かっていません。ノコギリのような吻の中央部には1対のヒゲがあり、海ではこのヒゲで海底にひそむエサとなるカニやエビなどを探し、吻を振って砂の中から掘り出しているのではないかと考えられています。ノコギリザメは、水族館での飼育例も少なく長期飼育が難しい魚です。

昨年の12月から2月にかけて、鴨川沖の底刺し網で捕獲されたノコギリザメ3尾の飼育展示を開始しました。はじめの1ヶ月は、活きたカニやエビ、鮮度の良いイワシなどを使って餌付けを試みましたが、差し出すエサには全く興味を示さず飼育係を困惑させました。この状態では衰弱死してしまうため、飼育係が水温12℃の水そうに潜り、口の中にエサを入れ強制的に食べさせてみました。最初は口に入れられるエサを嫌がって暴れたこともありましたが、しだいにうまく呑み込むようになり、餌付け開始後3ヶ月、1尾が棒の先に付けたイワシを自ら食べるようになり、飼育係もほっと一安心しました。今後は残りの2尾も早く餌付けて、まだ知られていない生態が解明できればと思っています。

（齋藤 純康）

▲ノコギリザメ *Pristiophorus japonicus*

さかまた No.63

（禁無断転載）

編集・発行 鴨川シーワールド

〒296-0041 千葉県鴨川市東町 1464－18

☎(0470)93－4803

発行日 平成16年7月

http://www.kamogawa-seaworld.jp

さかまた

鴨川シーワールド NO.63

迷子になったアザラシたち

南房総で確認されたアシカ・アザラシ類

▲上陸するようになった「カモちゃん」（3月21日）

3月9日の朝8時に東条海岸（鴨川市）の遊歩道を散歩中の人から、「海にアザラシがいる！」との連絡を受け、半信半疑で前の浜にかけつけると、波打ち際から2、3mの波間で小型のアザラシが顔を出しました。その後このアザラシは、4月16日に突然姿を消すまで約1ヶ月の間、サーファーの脇を泳いだり、潜ってエサの魚を捕まえたり、砂浜に上がって休息をしたり、鴨川シーワールド前の海岸で元気にすごし、「カモちゃん」として鴨川市民をはじめ多くの人に親しまれました。発見した当初、この個体は毛がわりの途中で大部分の毛が抜けていて、古い毛が残った部分に斑紋などの模様がなく一様に褐色だったことから、アゴヒゲアザラシの可能性が大きいと判断しました。しかし、その後毛がわりが進み新しい毛が生え出すと、体表に明瞭な黒い斑点模様を確認することができ、ゴマフアザラシの幼獣（オス）であることが判明しました。

「笑うアシカ」でおなじみのカリフォルニアアシカの近縁種であるニホンアシカが以前は日本の沿岸各地に生息していました。今では絶滅した可能性が高いと考えられていますが、鴨川でも明治40年頃までこのアシカを見ることができました。海岸から約2kmの沖合にぽつんと浮かぶ小島がかつての上陸場所で、今でも「海獺（アシカ）島」と呼ばれています。白浜や勝浦、大原にも「アシカ島」という地名が残されていて、この南房総にもニホンアシカが分布していたことを示しています。今ではニホンアシカを見ることはできませんが、鴨川シーワールドが1970年にオープンしてからこれまでに、南房総の鴨川や館山周辺で6種19頭のアザラシやキタオットセイの確認情報がよせられています。

▲波間に顔を出した「カモちゃん」（3月11日）

▲毛がわりがほぼ終了（4月13日）

神奈川県の帷子川や埼玉県の荒川にすみつき、一躍人気者となったアゴヒゲアザラシの「タマちゃん」が2001年8月に多摩川で発見される少し前に、千倉での目撃情報があります。何の資料も残されていないため、正確には同じ個体だとは断定できませんが、東京湾に入る前には北から房総半島を通過しているはずなので、その可能性は高いと思われます。1977年には、隣町の天津小湊の天津港で同じアゴヒゲアザラシが発見され、翌日に千倉で確認されたことがあります。この個体はその後東京湾に入り、木更津や船橋で再発見されていて、もし河川に入りこんでいたならば「元祖タマちゃん」として有名になっていたかもしれません。このほかにも、1987年に千倉でゴマフアザラシ、1989年に館山でワモンアザラシが確認されています。オホーツク海やベーリング海などの氷上で生活するこれらのアザラシは、冬になり流氷の発達にともない北海道沿岸に接近してきます。春になり流氷がとけ出すとそれにあわせて北の海へと戻っていきますが、この時季に流氷からはぐれて迷子になった個体がまれに本州や九州などで発見されることがあります。このほかに、アメリカのカリフォルニア周辺に生息するキタゾウアザラシが2001年に館山で発見されました。キタゾウアザラシは1989年に伊豆諸島の新島で1頭のオスが保護され、後に当館に搬入されたことがありますが、それに次ぐ日本での2例目の出現記録です。この個体は4日間ほど館山港で確認された後、姿を消してしまいました。

▲2001年10月26日　館山市で確認されたキタゾウアザラシ
（波左間漁業協同組合 小林 康弘氏 提供）

最も確認例が多いのはキタオットセイで、これまでに11頭が知られています。夏に北太平洋の島々で繁殖期をすごしたキタオットセイはその後回遊の旅に出て、日本の太平洋側では常磐沖や銚子沖まで南下し、これらの個体が冬から春にかけて南房総の沿岸で確認されることがあります。キタオットセイは回遊中は沖合の海上で休息をするので、沿岸に接近したり上陸をすることは異常なことで、中には衰弱していることもあり、当館ではこれまでに4頭を保護しています。

▲1993年3月31日　白子町で確認されたキタオットセイ

本来の生息地や回遊海域から離れたところでアザラシやキタオットセイが発見されることは、それ自体が異常な現象です。ただし、それらの個体が元の場所に戻る可能性がないわけではありませんし、いたずらに捕まえることは法律で禁止されています。しかし、中には衰弱し、すぐに治療をする必要のある個体がいるかもしれません。海岸でアシカやアザラシの仲間を発見したならば、水族館や地元の水産試験場・役場・警察などに連絡をしてください。そして、動物が自由に行動できるように、距離をおいて静かに見守ってあげてください。

南房総で確認されたアシカ・アザラシ類

年月日	種　名	場　所
1977年 9月 6日	アゴヒゲアザラシ	安房郡天津小湊町
1980年 2月23日	キタオットセイ	安房郡千倉町
1983年12月24日	キタオットセイ	長生郡一宮町
1986年 7月27日	アゴヒゲアザラシ	富津市竹岡
1987年 8月21日	ゴマフアザラシ	安房郡千倉町
1989年 5月17日	キタオットセイ	館山市那古
7月29日	ワモンアザラシ	館山市相浜
1993年 3月31日	キタオットセイ	長生郡白子町
4月 8日	キタオットセイ	勝浦市鵜原
1994年 3月20日	キタオットセイ	安房郡千倉町
1996年 2月22日	キタオットセイ	館山市相浜
1997年 2月27日	キタオットセイ	鴨川市太海
3月 1日	キタオットセイ	鴨川市鴨川漁協定置網
3月 4日	キタオットセイ(2頭)	鴨川市鴨川漁協定置網
2001年 3月 5日	ト　ド	勝浦市興津
10月26日	キタゾウアザラシ	館山市波左間
2002年 7月下旬	アゴヒゲアザラシ	安房郡千倉町
2004年 3月 9日	ゴマフアザラシ	鴨川市東町

（荒井 一利）

トピックス

シャチ三姉妹情報

▲パフォーマンスで活躍する「ララ」(左) と「ラビー」(右)

鴨川シーワールドで生まれたシャチ三姉妹の近況をご紹介しましょう。

現在長女「ラビー」と次女「ララ」はオスの「オスカー」と共にパフォーマンスに出場し活躍しています。

「ラビー」は1月に6歳を迎え、体長4.5m、体重1,500kgになり、ジャンプする姿にも迫力と貫禄が備わってきました。「ララ」は2月に3歳を迎え、体長3.8m、体重870kgになりました。お姉さんのラビーの後を追いかけてかわいいジャンプをしていましたが、今では1頭で元気なジャンプを見せてくれるようになりました。時折、「ラビー」に甘えて離れなくなることもありますが、すくすくと成長しています。

▲父親「ビンゴ」と母親「ステラ」の間ではしゃぐ「サラ」

▲母親「ステラ」と一緒にジャンプする「サラ」

三女「サラ」は、体長3.1m、体重約600kgにも成長し、5月31日に1歳の誕生日を迎えました。現在はパフォーマンスを行っているメインプール隣のサブプールで母親「ステラ」と父親「ビンゴ」の3頭で元気に泳いでおり、母乳の他に少しずつエサの魚も食べ始めています。

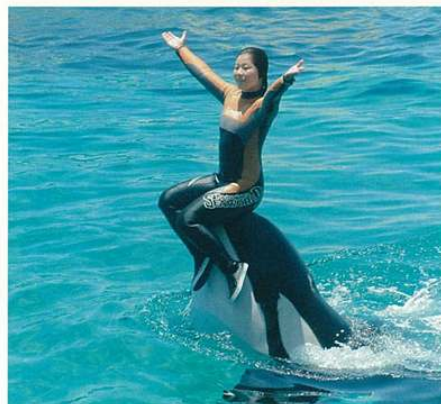
近い将来、「ラビー」、「ララ」、「サラ」の三姉妹でのパフォーマンス共演が楽しみです。

(奥田 香苗)

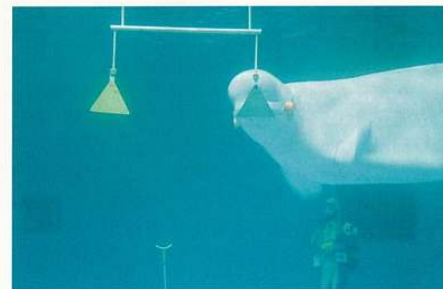
新パフォーマンスオープン!

▲カマイルカの「ウォーターターン」

パフォーマンスが一新しオープンしました。

イルカパフォーマンスでは、水のハードルを中心に前方に宙返りして背中から着水する「ウォーターターン」を公開しています。スピードとダイナミックさに優雅さが加わり今までとはちょっと変わった雰囲気をかもし出しています。ワルツのBGMにあわせて舞い上がるイルカたちの動きも絶妙です。

▲シャチの「シッティングリフト」

シャチパフォーマンスでは、トレーナーがシャチの口先に座って移動する「シッティングリフト」が新たに加わりました。シャチとトレーナーとの息の合った演技は見逃せません。

ベルーガパフォーマンスは、イルカの研究事例を元に水中適応能力を検証してゆく内容で、新しくなった映像装置を使い、ベルーガによる興味深い実験

▲めかくしをつけての材質識別

が行われています。

お馴染み、マンディー一家がくり広げるアシカパフォーマンスは、いつも家事と仕事に追われているお母さんを、お父さんと子どもたちが和ませるというストーリー展開で、明るく元気な家庭の大切さを伝えています。

▲みんなでランニング「イッチニ、イッチニ」

それぞれの動物の特徴を生かした平成16年度新パフォーマンスを是非お楽しみ下さい。

(佐伯 宏美)

モラ モラ

●保護されたコビレゴンドウ

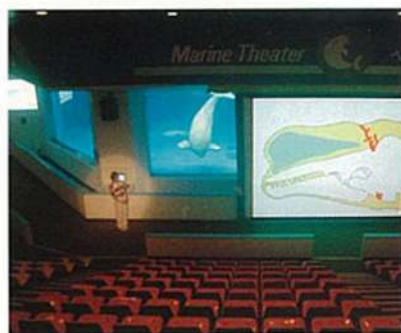
1月10日、勝浦市守谷海岸に打ち上げられたコビレゴンドウを保護しました。地元消防署の職員が4人がかりで何回も沖に出して泳がせようとしましたが、再び海岸に乗り上げてしまうため、当館に保護依頼が入ったものです。この個体はオスの子どもで、衰弱がひどく群れからはぐれて打ち上げられたようです。飼育係の懸命な治療の結果、次第に元気になり現在では1日に11kgのイカや魚を食べ、体長も274cmと保護した4ヶ月前より約20cmも大きくなりました。コビレゴンドウは、成長したオスでは体長5mにもなり、国内ではわずか4頭しか飼育されていない珍しいイルカです。これからの成長を楽しみにしています。

（根岸 竜矢）

●ゴマフアザラシの赤ちゃん誕生

3月30日、「アシカ・アザラシの海」でゴマフアザラシが生まれました。当館でのゴマフアザラシの出産は10年ぶりのことです。真っ白な新生児毛でおおわれた赤ちゃんはオスで、生後3日目には自らプールに入り、心配そうに後を追いかける母親をしり目に、泳ぎは日に日に上達していきました。赤ちゃんの成長はとても早く、生後三週間で体重は生まれた時のおよそ3倍の30kgにもなり、白い毛も抜け替わり親と同じ模様になって親離れの時期を迎えました。そこで、親から離して小さなプールに小魚を入れてみると、生後39日目に初めてエサを食べました。今では1日に1.5kg程のエサを係員の手から食べるようになり、のびのびと育っています。

（浅井 健吾）

●マリンシアターの模様替え

4月13日～23日の間、マリンシアターショープールの塗装補修工事が行われました。プールの水を空にしての大がかりな工事で、工事期間中、3頭のベルーガ（シロイルカ）にはトレーニングプールで少々せまい思いをさせてしまいました。くっきりとした青に塗装されたプールは、ベルーガの白さをより美しく見せるものとなりました。また、塗装工事の他に映写装置も新しくなり、従来の正面のスクリーンに加えて、左右にも補助スクリーンが増設されました。今後は、きれいになったマリンシアターで映像をおりまぜて、イルカの水中適応能力を分かりやすく紹介していきたいと思っています。

（村松 政之）

●ロッキースタジアムで成人式

1月11日にアシカパフォーマンスが行われる「ロッキースタジアム」で、鴨川市の成人式が行われ、300人の新成人たちで賑わいました。地域性を生かした成人式を開催したいという鴨川市の強い意向により実現したものです。式の最後には当館のスター、「笑うアシカ」こと、カリフォルニアアシカのマンディーからお祝いの笑顔がプレゼントされました。この祝福に新成人たちは満面の笑顔で大喜びし、式典終了後にも再び登場した「笑うアシカ」との記念撮影を楽しんでいました。いつまでも笑顔を忘れずに、頑張れ新成人！

（岡村　均）